

う対立する要素が、実は一つの人間、一つの生命体として和合している。この和合は、まるで多様な楽器と音色が一つの楽曲を作り上げるようなものです。ケンジさんが仕事場で「なんとなく」という表現を使うと怒られるかもしれない現代社会でも、その「なんとなく」が指し示す曖昧さや多面性は、人間が持つ豊かな内面と直接繋がっています。このような多面性は、ケンジさんが選んだキャリアや興味の対象にも反映されていると言えるでしょう。数学においても、音楽においても、そして哲学においても、それぞれが持つ「不完全性」や「多面性」を受け入れ、その上で新しい何かを創造していく姿勢が見えます。ケンジさんがこれからのような道を選ぶにせよ、その多様な興味と経験が織り成す「内面の楽曲」は、きつと新しい何かを生み出す力となるでしょう。そして、その力は論理だけではなく、感性や直感、そして何より「人間らしさ」に根ざしているのです。それはおそらく、言葉そのものの力ででしょう。ケンジさんが言うように、音



全然タイミングが合っていない

楽にはその瞬間、その場で全てを平等にする力があります。それは言葉にも言えることで、特に小説や詩にその力を感じます。西尾維新のような作家が織り成す言葉の世界に触れると、そこには論理や合理性を超えた何かが存在します。ケンジさんが音楽で感じる「不合理なこだわり」や「野生的な現象」は、言葉においても同様に感じられるものがあると思います。それは、言葉や音楽が持つ「形而上的な力」であり、その力に触れることで、私たちは何か普遍的な真実に近づくのかもしれない。このような感性は、ケンジさんが数学や論理に対する深いこだわりとも矛盾しないと思います。むしろ、その両方が高次の何かを形作る要素となっているのでしょう。論理と感性、合理と不合理、それらは一見対立するようである、実は一つの大きな「楽曲」を作り上げているのです。そして、その「楽曲」はケンジさん自身の人生と重なり、多くの人々に影響を与えるでしょう。それが芸術であり、それが人間の持つ無限の可能性であると、私は信じています。